

## 艶笑譚の一話型とその変容

—口承説話における「主人公の交替」に及んで—

真 下 厚

はじめに

艶笑譚の話型集成を試みたものとして成田守氏の「艶笑譚目録」<sup>(1)</sup>がある。そこにはとり上げられていないが、各地に伝播・伝承され、また類話が小咄本や落語にもみえる艶笑譚がある。その話は一つの話型をもつものと認め得るのではないか。また、その類話のなかには主人公が交替し、話の性格が異なってしまったものがある。口承説話において、こうした「主人公の交替」はなぜ生じるに至ったか。本稿ではこうした問題を考えてみたい。

—

江戸時代中期、壹岐島の神道学者であった吉野秀政は『神国愚童随筆』という著作をものしている。今日その巻十一・十二・十四の自筆本三巻が残されているが、そこには数多くの説話が載せられている。巻十二の「可笑」編は二十八の説話よりなるが、そのうち十話は艶笑譚である。この書を早く紹介した山口

麻太郎氏は、秀政がこの書に艶笑譚を採録していることについて、「翁はそれらのいること話も、みだりがはしき心もてせず、いとも平然と素朴に書誌せれば、今見ても学書として襟を正させらるる思ひするなり」と述べている。<sup>(2)</sup>

さて、そのなかに「賈比丘尼に宿をかし親子四人玉矛を更ける事」と題する、次のような話が載せられている。

長崎の一男、田舎に用事ありてゆきける道にて比丘尼に逢けり。「何地にゆき給ふぞ」と問ければ、「長崎にまかる」と答へけり。彼男をのが家にやとらしめ、一夜犯さばやと思ひ、「長崎に出させ□□御宿を仕ふまつるべし。但某は田舎に用事兩三日滞留せり。何町何左衛門所と御尋ねあれ。御滞留もあれかし。罷帰り御物語申べし」といひて別れけり。比丘尼長崎に入り彼男の家に至りかくといひければ、女房こさかしくあいさつし、湯などとらせ兩人の娘に、「御とせんにもあるべし。座敷に出おはなしなんと申せ」といひ□□。姉立出、夜もすから四方山のものが見たりなんして一所にねてけり。比丘尼翌日はあちこちと見

物し、又右の宿に來りけり。姉娘に座敷に出てあいさつせよといへとも曾てうけこはず。故次の娘に出よといひければ立出て夜もすがらかたりてそばに伏しけり。又翌日も比丘尼あちこち見物して、右の宿に來りけり。故二人の娘に罷出御伽申べしと再三いふといへとも、をのくほ、笑顔にて領掌の気色もなし。母こゝろ得ずながら、「しかあらは今夜は某御伽申べし」と座敷に出て自他のもの□□□□としていねてけり。其翌日○（朱書——は比丘尼）暇乞して帰れり。路にて宿の主にゆき逢、「仰せにまかせ御宅にまいりいろく御懇意に預り忝候」といひけり。宿主聞て、「宿にも居合侍らす。さそ無調法たらん。せめて今一宿なされかし。御同道申侍らん」と手をとり長崎の方へひきすれば、「御志は忝く存候得共、又他方へも罷越候間、重て御縁次第□□にかゝり申さん」と引放たんとす。宿主人□□此比丘尼に宿をかせしも一夜枕をならへんためなり。され共用事に隙入念慮通らずた、かへさんも遺恨なり。いさや畑のくろにひきすりゆきて交合せんと思ひければ、「ひたすら御同道申さん」と畑のくろに誘引ゆき、比丘尼の前に手をかけ押たほさんとしければ、比丘尼却て彼男を押伏、尻をまくり大なる尻をおしこみ腰をゆすり氣をやり、「過分なり」といひてされり。彼宿主大便道までとられ、ほうくゝ家に帰り、「此間留守に比丘尼□□られるや」といへは女房しかりといへり。「夜も母子ともに御咄なんど申承り候哉」と問へば母子ともにうす笑ひしてこたへず。彼男早合点し、「汝共とかうをいはさるこそ道理なり。我さへ途中に

てゆき逢、毛尻一番とられたり」といひけり。<sup>(3)</sup>  
これを要約すると、次のようなものとなる。

(1) 長崎の男が道で尼に出会って、この尼を犯そうとたくらみ、家に泊まるように勧める。

(2) 尼が男の留守宅を訪れると、女房は娘たちにもてなすように言う。姉娘は一晚中四方山話をして一所に寝る。次の夜、女房がまた姉娘に座敷に出よと言うが、姉娘は受け入れない。それで妹娘に命じ、妹娘は一晚中語つて尼のそばで寝る。

(3) さらに次の夜、女房は二人の娘に再三話をしに行くように言うが、娘たちがそれぞれ微笑みながら受け入れないので、女房は自分が話相手をして寝る。

(4) その次の日、尼がその家から帰る道で男に出会う。男はもう一泊するように勧めるが、尼が従わないので畑で押し倒そうとすると、尼が逆に男を押し伏せて尻を犯して去る。

(5) 男はほうほうの体で家に帰って女房と娘に尼のことを尋ね、自分まで毛尻一番とられたと言う。

こうした艶笑譚を含む説話の採録について、山口氏は「大部分民間よりの直接採集なる事明かなり」といい、山内益次郎氏も「作者が各地で実際に聞いたものを収録したものと思われ、大胆でもかも率直な記述は、他にあまり類を見ない。従つてその原拠となる本や、類話となる民譚も容易に見当らない」と述べている。<sup>(5)</sup>こ

れに対して、武藤禎夫氏はこの艶笑譚をさして「『間女畑』（天明二頃）の「お比丘尼」と同想話なども見える。九州吉岐氏までの話題がいく人もの断本作者の耳に、偶然別個に入ったものとは思われず、明らかに、秀政が断本から得た話柄であった」とし、「このように脚色し直した話は、すでに彼ら自身の創作話として紹介され、その地方に口承されていた」と説いている。<sup>(6)</sup>

江戸小咄本『間女畑』は宮尾しげを氏によって早く紹介されたが、その「御びく尼」を武藤氏が「安永期艶笑断本六種」（太平書屋、二〇〇〇年）に翻刻したものをもとに要約すると、次のようになる。

- (1) ある馬子が回国する美しい尼を犯そうとして家に泊まるように勧める。
- (2) 馬子が隣に出かけ、女房は尼をもてなした後、納戸に寝かせた尼が寒いだろうからと娘に一つ蒲団に寝るように言う。尼は上に乗っかり、娘を犯す。娘はほうほうの体で納戸を出る。
- (3) 女房が娘に尋ねても「フ、フン」と言うばかりでらちが明かないので、自分が尼のところに行くくと娘と同じように犯される。
- (4) 帰ってきた馬子が女房と娘に尋ねても「フ、フン」と言うばかりなので納戸に行き、尼に無理矢理乗っかろうとすると下からはね返され、尻を犯されて逃げ出る。
- (5) 女房と娘がなぜ帰ってきたのかと尋ねると、馬子は「自分もフ、フンな目にあった」と言う。

これを先の『神国愚童随筆』の艶笑譚と比較すると、主人公の男の仕事や娘の人数など細部は異なるが、そのモチーフやプロットは一致しており、両者は何らかの関わりをもつものであったと考えられる。

ところで、武藤氏は「間女畑」の「御びくに」についての解説で「浪花桂派落語演題集」に「尾上多見江」<sup>おのえたみえ</sup>がある。尾上多見蔵あたりの弟子で多見江という女形の役者、巡業先から急に一人帰ることになり、女形のことゆえ女装のまま出立しての旅先の出来事としてあり、小咄の不自然な筋立てが改められている」と述べ、「御びくに」をもとにこの艶笑落語が仕立てられたとしている。<sup>(8)</sup> この落語について、東大落語会編『落語事典』（青蛙房、一九六九年）では「いいえ」が本題とし、「嵐民弥」「尾上多見江」「多見江尻」「佐野川市松」などの別名をあげている。<sup>(9)</sup> 『落語事典』に載せられている梗概をこれまでと同様に整理してみると、次のようになる。

- (1) ある馬子が旅する女形を家に泊まるように勧める。
- (2) 布団が足りないなので、その女形は馬子の妻と一緒に寝てその妻を犯す。
- (3) 次の夜、女形はその家の娘も犯す。
- (4) 馬子は女形を家から送ってゆく途中でこの女形を犯そうとするが、逆に女形に犯されてしまう。
- (5) 馬子は家に帰って妻と娘にこの女形との関係を尋ねるが、二人は前を押さえて「いいえ」と言う。妻が馬子に「何かあつ

たのか」と尋ねると、馬子は後ろを押さえて「いいえ」と言う。これを先の『神国愚童随筆』『間女畑』のものと比べると、それらが旅の者を尼とするのに対してこれは役者の女形とする点、またそれらが娘・妻の順に交わってゆくのに対してこれは妻・娘の順とする点など異なるところもあるが、モチーフやプロットは基本的に一致している。しかも、愚かな男が「我さへ途中にてゆき逢、毛尻一番とられたり」（『神国愚童随筆』）「おれも、フ、フンな目にあつたよ」（『間女畑』）と言つたというかたちで話が結ばれるのと同様、この落語でも馬子が後ろを押さえて「いいえ」と言つたというのがオチとなる。こうしたところから、これらはやはり関係あるものと考えられる。

## 二

こうしたものの類話を口承されたものに求めてみると、次のようなものが見出される。

まず、佐々木徳夫氏『民話・みちのく艶笑譚 第二集』（ひかり書房、一九八二年）所載の新潟県旧東頸城郡松代町福島・高橋八十八氏（S六・四・一生）伝承「とんだ庵主さま」である。

昔あつたと。

ある所にたいそう金持ちの家があつてな、ある日のこと、庵主さまが托鉢に来たと。きれげな庵主さまだったんで、一晚泊めて、先祖さまにお経上げてもらうことにしたと。

その家のお父つつあは色好きで、よく替女さや庵主さまを

泊めては夜這いに行つて、はめて楽しんでいたがで、今夜も若くてきれげな庵主さまを抱こうという魂胆だったと。お母さはそれを知つてるもんだすけ、先回りして、

「お父つつあ、今夜はおれが庵主さまと一緒に寝るすけ、お前は出居（客間）で寝らっしゃれ」

「そうか、それもそうだな。出居は鼠が出て、お客さんに悪いですけな」

お父つつあはしまったと思つたでも（けれど）、仕方なくすごすごと出居へ寝たと。お母さまと庵主さまは部屋で一つの布団に抱からつて寝たと。ところが、その庵主さまは女だと思つていたら男のがで、夜中になると、お母さまの股の中へ割り込んで、はめてしまつたと。お母さまはたまげたでも、女と間違うぐれえのいい男のへのが入つたもんだんが、けつこに（すつかり）喜んで、自分から腰を使って持ち上げたり、回したりしたと。昔から「医者、坊主、先生」と言つて、三助平と言われてんが、この坊主の強い強い、一晚中お母さまを抱きつづけて、二人して極楽浄土へ行つて遊んでいたと。

次の朝げ、二人は知らん面して起きて朝飯食つて、庵主さまは、

「今日は小屋丸・池之端・下山・海老の方へ托鉢に回つてこようと思うが、帰りにもう一晚泊めてくんねえかね」と言つたと。「ああ、なじよも（どうぞ）泊まってくんねかい」と、お父つつあとお母さまは思わず一緒に返事したと。お父つつあは今夜こ

そ思いを遂げてやろう、おっ母さばもう一度楽しもうと思つたてんがな。晩方になると庵主さまは托鉢から帰つて来て、また泊めてもらつことになつたと。ところが、その家の年頃の娘が、「今夜はおれが庵主さまと寝る」と言い出したと。親達はそれはだめだとも言えず、よしよしということにしたと。庵主さまは娘の部屋で一緒に寝たと。さあ、夜中になると庵主さまは正体を現わして、娘を抱きしめてきたと。娘も最初はたまげたでも、村の若い衆の夜這いで男の味を知つてるもんだすけ、生娘でないで喜んで迎え入れたと。庵主さまは昨夜の五十婆さと違つて若いびちんびちんした娘の体に、けつこに（すつかり）夢中になつてしまふし、娘も村の若い衆の汗臭えのや爾くそ臭えのと違つて、女みてえにきれげな滑つこい肌を抱かれて、男つて者がこんなにも味がよいものか、と夢見心地で体中が溶ける思いでしがみついて腰使つたと。一晚中二人は離れないで、天国やら極楽やらへ行つていたと。次の朝、庵主さまが別れを告げて行くのを見送つて、お父つつあは、とうとう二晩もしそなつたかと口惜しがつていたと。おっ母さが娘に、そうつと、

「あの庵主さまは男だつたけねえ」

「そうだつてのう」

「おれ、はめられちゃつたわ」

「おっ母さもかえ、おらも一晚中はめられていたでえ。とてもいいかつた」

「それじゃお互いさまだねか。これはお父つつあに内緒にしておこうじゃ」

「そうだねえ」と言つたと。

佐々木氏によると、話者の高橋氏は郵便配達の仕事をしていたとのことで届け先の人たちと交わるなかでしばしば語られたものという。

さて、これを同様に要約すると、次のようになる。

(1) 尼が金持ちの家に托鉢に来て、主は尼が美しかったので一晚家に泊める。

(2) 妻は主に別の部屋に寝るように言い、尼と一つの布団で寝る。尼の正体は男で、妻はその尼と交わる。

(3) 尼はもう一晚泊めてほしいと言い、夫婦共に喜んで泊める。その夜は娘と一緒に寝て尼と喜んで交わる。

(4) 翌朝、尼は立ち去る。

(5) 主は内心残念に思い、母娘は尼とこのことを楽しく語り合う。

これを『神国愚童随筆』、『問女畑』、艶笑落語のものと比較すると、(4)(5)の部分が異なっており、主人が犯されて母娘に尻が痛いと言げるといふ部分が欠落している。あまりに品位に欠けるものとして母娘の楽しい語らいというかたちで結ばれたのかもしれないが、『神国愚童随筆』「御びくに」などの話型と基本的に一致しているといえよう。

次に、水澤謙一氏が採集していた話を出版社編集部によつて

資料化された『えちご艶笑譚』（高志書院、一九九八年）所載の新潟県田北魚沼郡小出町沢田の二女性による「男尼（一）」がある。

中原へのあんじゅさまが泊まったと。あんじゅさま、な  
じょーんか器量の良いあんじゅさまだったてんがね。めーご  
きな、あんじゅさまがの、泊めてくれって来た。ほした、  
その家、泊まることになったと。

ほしたら、あんま、めこきなあんじゅさまだんだんがの、  
その家のの、つあまがの、

「今夜、どうでも、あのあんじゅさまをひとつ、床いってや  
ろう」ってがんで、夜されの、あんじゅさまの寝てるここへの、  
こっそり夜ばいといったと。

ほうしたら、あんじゅさまの布団の中へ、そろーと入ろう  
としたらの、あんじゅさまがたまげてね、

「おごったー、おかか、おごったで、とーとが、おれか  
もうて、おごったーぜ」っていつての、おかかのここへの、  
布団の中へ、ちよろーんと入ったと。

ほしたら、つあまは、しょうしんだんがね、こそこそって  
自分の部屋へ戻って寝てたども、悔しくての、なんとかして  
あれしたろと思うてだんだどもね。

朝けになつての、あんじゅさまが「世話になつてありがと  
うございました」ってがんで、さようならしたと。そうだども、  
まーだそのつあまはあきらめらんないで、

「どうでも、このあんじゅさま、ひとつ、林んなかへでもな

んでもひっこんでやろう」と思うての、あんじゅさまの後、  
おっかけていったらの、ずーと村外れのほうまでおっかけて  
いつて、森の中へでも行つて、言うこと聞かせようと思つての、  
村外れのほうまでおっかけていったと。

そうしたら、そのあんじゅさまがの、こつちくるんと思  
いたかと思つとの、お尻をまくつて、大事でえじなとこのね、ながー  
いがんのね、くるんくるん、くるんくるん、くるんくるん、く  
るんくるんと、まわして見せた。ほしたらね、あんじゅさ  
までなくて、男で あつたと。

いつつお、いいめさしてもうたがん、おかかであつたと。  
そいはなし。

やはり、これを要約してみると次のようになる。

(1) 美しい尼が中原村のある家に泊めてほしいと言って泊  
めてもらうことになる。

(2) 家の主が尼を犯そうと思つて尼の布団に入ろうとする  
が、尼は大声で騒いでその妻の布団に入る。

(3) 翌朝、家の主は村外れで尼を犯そうとするが、尼の正  
体は男であることがわかる。

(4) 一番いい目をしたのは妻であつたという。

これを先のものと比較すると、この話では尼が泊まる家には  
主人と妻が住むだけであつて、(2)のモチーフが欠けているよ  
うに娘はいないとすること、また(4)(5)のように主人が犯  
されると語られていないことが異なっている。この話の語り手

は女性であるため、他の話にみられるような露骨な語りを避けて語ったものかもしれない。そのようなためにいくらか断片化しているが、モチーフやプロットは他の話とやはり基本的に一致しているといえよう。

以上、これらの艶笑譚の類話は江戸小咄や落語のなかにだけではなく、このように口承されてきたものが新潟県の二地域において見出されるのであり、旅の厄を泊めて犯そうとして逆に犯されてしまった愚かな男の失敗という一つの話型として認定し得よう。なお、武藤氏は旅人を「厄」とする設定が不自然だというが、口承されているものはこのようにいずれも「厄」としており、本話型はそうした話として伝播・流布していたものと思われる。

このようなどころから、吉野秀政は武藤氏がいうような、脚本を読んだものを脚色し直して書いたということではなく、山口氏や山内氏が説くように民間で実際に口承されていた話を『神国愚童隨筆』に書き記したと考えるのが穏当であろう。

### 三

この話型をもつ説話が沖縄宮古島に伝播し、伝承されてきている。

福田晃氏・佐渡山安公氏・下地利幸氏・岡本克江氏・山本清氏編『城辺町の昔話(下)』(同朋舎出版、一九九一年)所載の宮古島旧城辺町長中・下地玄信氏(M四三・二・八生)が伝承する「神さまから与えられた女の徳」(山口裕子氏・波平和美氏

採集)は次のような話である。

んきゃーんどう、髪ぬ、女まい、男まい結いゆう時代ん、与那覇ん男、上地んな女ぬういてい、くぬ上地ぬ女むう、与那覇ぬ男ぬ、そうとう望みうーすがどう、んや、ななくういぬミガぬ子てい、家からいでいなしいうてい、「のうしい、くりう女しいらい方法ぬ、にゃーんむぬが」ていちゃーか、考いうていんや、こんどう、盆ん女装やしい、重箱うくうつふい、うぬ娘ぬ家んかい、「とうんがらあ」てい、いきばどう、「与那覇ぬとうんがらどうきす」てい、うぬ女装ましいどうんや、いきむぬやあばどう、男ていぬむぬうばあんや、すさだなしいうてい、「くう」ていんや、しいばんや、うまんかいばいじ、いきつていんや、うまん、ごちそうやしい、どうが持ちいきうーむぬうばあんや、かまんとうらしつてい、盆つあしいうーてい、うんぬ夜ん、うまん泊りうーてい、うぬとうんがらがいん寝ふい、まあつき寝ふいうーていんや、「ちい、とうんがら。私たあびさむぬばあきやあば、ちゃーしみい」てい、言じばどう、くぬとうんりがらあんや家ぬとうんがらあ、「ゆぬむぬさあい」てい、ういば、んやくぬ、与那覇ぬ男ま、男どうやあば、「んや、びさむぬばあきしい、ちやあしみいやあ」ていんや、しいうりつてい、あとをんや、うぬ家ぬ娘まあ、ういんとうずしいらいにゃーんていんさいんや、いら。

あつていんや、母親んかい、「あんちいどうんや、とうずしいらいにゃーん」てい、泣きうーてい、あいじばどうんや、うぬ男ま

うりやとうずしつていんや、ぴりうーきゃ、「のうていが、ぴとうぬ娘うあんちい、とうずすつか」ていんや、母親があいじばどう、「のうてい、うふあがぬ、うりうあいぬが」てい、かいかちみうーてい、うぬ母親うまい、とうずしいばどう、また、二人、母親まい子まい泣きうーきゃ、父親ぬあとう追いきしつてい、「のうていが、うふあたあ、あんちいういが」てい、あいじばどう、「私たうどうんや、あんちいしつていびい」ていんや、あいじばどう、うぬ言えぬ父親まあ、追いくしいき、うるうかつみんや、みんがつていうーきゃ、うぬ父親まい、とういうたつきらいつてい、尻むう、とうずしらい、三人ぬむぬんや、ばみき泣きんや、家んすーかいきしうーていばなしばどうんや、「うふあたが、二人んぎゃーんや、神ぬつふいうーく、ていんとうびいきぬあいば、ようやくどうやい。私やあ尻ぬうどう、とうずしらいんや、ぶみき痛まあしいんや、うー」てい、泣き、三人うーたあ、ていぬむかしばなし。  
(昔ね、髪を、女も、男も結っている時代に、与那覇には男上地には女がいて、この上地の女を、与那覇の男が、たいへんに望んでいるのだがね、(娘は)七重垣のミガの子と(いつて)、家から出ずにいて、「どうにか、これを(私の)女にする方法がないものか」とばかり、考えていてまあ、こんどは、盆に、女装をして、重箱(にご馳走を)こしらえ、その娘の家に、「友達よ」と、行くとね、「与那覇の友達がね来た」と、その女装をしてねまあ、行ったものだからね、男だとのことはまあ、知らずにいて、「おいで」とまあ、するとまあ、そこに入って、行ってまあ、

そこで、ご馳走をして、自分が持っている物をばまあ、そこ(その家の人)に渡して、盆をしていて、その夜は、そこに泊まっています、その友達の側に寝て、いっしょに寝ていてまあ、「さあ友達よ。私達は平たい者どうしだから、重ねてみよう」と、言ううとね、この友達はまあ、(その)家の友達は、「いいよ」と、(言つて)いるので、まあこの、与那覇の男は、男であるので、「さあ、平たい者どうし、重ねてみようね」とまあ、していて、後はまあ、その家の娘は、それ(男)に犯されてしまったんだったよまあ、ね。それでまあ、母親に、「このようにまあ、犯されてしまった」と、泣いていて、言ううとねまあ、その男は、それを犯してまあ、逃げたので、「どうして、人の娘をそのように、犯すのか」とまあ、母親が、言ううとね、「どうして、お前が、それを言うのか」と、こうして掴んでいて、その母親をも、犯したのでね、また、二人、母親も子も泣いていると、男(父親)が後を追って来て、「どうして、お前たちは、そうしているのか」と、言ううとね、「私たちをねまあ、こうして(犯して)逃げた」とまあ、言ううとね、その家の父親も、(男を)追って行って、それを掴んでまあ、やつつけようとすると、その父親も、取って投げ倒されて、尻を、犯されて、三人の者はまあ、大声で泣いてまあ、「お前たち、二人だけは、神の造つてある、女陰があるので、大したことはない。私は尻をね、犯されてまあ、(今でも)熱っぽく痛んでまあ、いるよ」と、泣いて、三人いた、との昔語。

これを要約してみると、次のようになる。



(1) 与那覇の男が大事に育てられた上地の娘を好きになり、なんとか方法がないものかと考え、女装して娘の家に  
出かける。

(2) 家の人は欲待して男を泊め、娘と一緒に寝かせる。男は娘に重なつて寝ようと言う。その後、娘は男に犯されてしまう。

(3) 娘が母親に泣いて告げ、母親が男に問い糺すと、男は母親も犯す。

(4) 母親と娘が泣いているわけを知った父親が男を追って行き、その父親も男に尻を犯されてしまう。

(5) 父親は、母親と娘は大したことはないが自分は尻を犯されて大変だ、と言つて泣く。

これは基本的にこの話型に沿っているといえる。とりわけ、その結末部(5)において父親が自分は尻を犯されて大変だと言つとしているのは、この話型における話の面白さを集約する結末のモチーフをそのまま踏襲しているといえよう。

しかし、『神国愚童隨筆』所載の説話や新潟県で口承されている艶笑譚などではよこしまな思いを抱いて尼(実は男)を家に泊めた男の愚かな失敗譚となつているのに対して、この話では家に泊まった娘(実は男)のほうを主人公としてその知恵を働かせて自らの思いを成し遂げたという狡猾者譚的な成功譚として語られているところが大きく異なっている。

宮古島にはこの類話と考えられる話が伝承されている。『上野

村の民話』(上野村教育委員会、一九八一年)所載の宮古島旧上野村新里の新里ノチ氏(M三三・一二・二生)の「男になった娘」(佐渡山安公氏・辻川氏採集)という話である。それを要約してみると、次のようなものとなる。

(a) 川満の人と上地の人は夫婦になれないといういわれがある。

(1) 川満の娘と上地の娘は仲良しで互いの家を行き来しながら育つ。

(2) 成年に達する前、部屋で一緒に寝ているとき、男女の交わりのまねをしようと云つて一人(実は男)が誘い、もう一人の娘と交わる。

(3) 娘があわてて大声で母親を呼ぶと、男は母親も犯す。

(4) 母親の声を聞いて父親がやつて来たので、男はその肛門を犯す。男は逃げて豆の木の中に隠れてしまう。

(5) 両親は、化け物を友だちのように思つて大事にしていたのだ、と嘆く。

(b) それで、川満の人と上地の人はいつの世までも夫婦になるな、と言われているのだ。

これを先の下地氏の話と比べてみると、(5)の部分においてやや異なるが、(1)から(4)までのモチーフは下地氏のものとはほぼ一致している。また、下地氏の話では与那覇村の男と上地村の娘、この話では川満村の娘と上地村の娘(そのいずれかが実は男)というように隣村の村人同士の関係として語られて

いるところが共通している。こうした点から考えると、この二つの話は互いに関連するもののように思われる。

ただ、新里氏が伝承する話は(a)(b)の部分が加わっており、川満村の人と上地村の人が結婚しないといういわれを語る話とされている。沖縄の昔話が由来譚的な傾向をもつことは岩瀬博氏、松浪久子氏、福田晃氏によって指摘されてきているが、この話は当地域に伝播してきた艶笑譚の話し型に沿う話がこのような口承文化のなかで由来譚として変容していったと考えられる。それでは、下地氏が伝承する話はこうした由来譚から生み出されてきたのであろうか。

これら両話とともに隣村の村人同士の関係として語り出されているが、それは隣村同士の対立の由来を説く新里氏のような話では確かに自然な設定であるように思われる。しかし、下地氏の話と新里氏の話とをさらに比べてみると、先に述べたように(5)の部分が多くなっている。下地氏の話では元の話し型のモチーフに沿うかたちをとって父親が自分を尻を犯されて大変だと言うとして笑いを強調するものとなっているのに対して、新里氏の話では両親が男を娘の友だちと思って大切にしていたことを後悔するとして(b)の由来につながるように語り変えられている。こうしたところからすれば、下地氏の話が新里氏の話のような由来譚からそのまま(a)(b)の部分を脱落させて生まれてきたとは考えにくいように思われる。

やはり宮古島では、新里氏の話のようなものと並行しつつ、

下地氏の話のようなものが狡猾者譚として伝承されてきたのではなからうか。

筆者はかつてこの下地氏の話を含む宮古島の艶笑譚と『神国愚童随筆』の説話と共通するものが多く見出されることを指摘し、「民話における『海のネットワーク』を窺うことができる」と述べたことがある。そして、下地氏の話については、「おそらく『神国愚童随筆』のような話をもとに知恵ある男の話として語り変えられていったのであろう」とし、「こうした艶笑譚は、奄美・沖縄の島々では、神々への信仰を伝える精神風土のなかで性の持つ豊穣性と関わって語られてきたのであろう」とした<sup>(11)</sup>。

そこであらためて考えてみたいのは、この話し型の、旅の尼や家に泊めた愚かな男の失敗譚が宮古島の口承文化の世界のなかで下地氏の話のような、家に泊まった娘(実は男)のほうを主人公として知恵を働かせて思いを遂げたという狡猾者の成功譚として変容したのはどうしてなのかという点である。

こうした口承説話の変容という現象には当該地域における説話伝承の傾向や特徴からうかがわれる伝承心意が大きく関わっているであろうが、このような点について宮古諸島ではいかがであろうか。

宮古諸島における口承説話の伝承は多種多様で、近年まできわめて濃密なものであった。当地域における市町村単位の組織的な口承説話調査は一九七六年から一九八三年まで行われ、その成果の一部は『城辺町の昔話(上)』『同(下)』として著され

ている。この昔話集の解説で、福田氏は「当地方の伝承が真実に傾斜するとはいえ、神話・伝説・史譚など、いちだんと真実を強調する話群から、いささか虚構を愉しむ本格昔話の話群に及び、さらに事実めかしく仕立てながら意外な展開に心を惹く因縁化物話・笑話・鳥獣草木譚に至る、当地方の伝承世界の豊かさ」と述べて、当地域の口承説話があらゆるジャンルにわたることを指摘している。そのなかで、本格昔話については「伝承の円熟さは、他の沖繩諸島にはうかがえぬものであった」とし、笑話については「本格昔話に分類してあげたカタイラマーガの巧智譚なども笑話に含めると、笑話はいちだんと豊かな話柄を保有していることにな」と述べている。<sup>(12)</sup>

当地域では聞き手がいづちを打って本格昔話がりズミカルに語られるようなこともあった。<sup>(13)</sup>また、笑話のなかには「狂言トゥナ」「狂言ガニ」「根間カマドガニ」などという、咄の者を思わせるような人物を主人公とする「おどけ者」話が多くみられ、口承説話の世界が豊かに熟成していたことが思われるのである。このような伝承状況は近年に限ったことではなかった。『御嶽由来記』（二七〇五年）に始まる、琉球王府への報告書である「宮古島旧記」には地域に口承されてきた御嶽・祭祀由来の説話が数多く記載されている。かつて論じた、<sup>(14)</sup>エイとの交わりをいう本土地域の艶笑譚が伝播し宮古島において祭祀の神聖な由来伝承として変容した説話が記載されているのもこの『御嶽由来記』である。このような口承説話の変容には、新たな伝承を生み出

してゆく可能性をもつような、口承説話の豊かな伝承状況がその環境としてまずは必要であろう。いままで述べたように、宮古諸島はそのような条件を有する地域であった。

この宮古諸島における口承説話の特徴の一つとして英雄を主人公とする伝説・史譚が色濃く伝承されてきたことがある。宮古島を統一したとされる目黒盛豊見親やその玄孫である仲宗根豊見親玄雅、そして彼らと覇を争ったとされる飛鳥主や金志川豊見親などの時代の争いや戦いの話が先の「宮古島旧記」に数多く記されているだけでなく、今日に至るまで口承のかたちで伝えられてきているのである。こうした話のなかには、父浦嶋大立大殿をその兄加賀良按司の謀によつて殺された兼久が巧みに仇討ちを果たしたという『雍正旧記』（一七二七年）所載の話や仲宗根豊見親が伊良部高殿をだまして退治したという『城辺町の昔話（下）』所載の話のようにその知恵を働かせて敵に勝利したというものがしばしば見出される。英雄たちの闘争においてこのような知恵は力であつて、そうした世界を伝承してきた人々にとつてこのような知恵を働かせることは優れたこととして尊んできたものと思われる。福田氏は「（仲宗根豊見親）玄雅の勢威はおそるべきものであつたが、それはしばしば知恵の働きで果されることであつた。したがつて、玄雅は幼少の時期から知恵に秀れていたとする逸話を多く留めており」、仲宗根豊見親玄雅を主人公とする「巧智譚もこれと連動して伝えられることになつたにちがいない」と述べている。<sup>(15)</sup>

また、本格昔話や笑話の世界にもこうした知恵の働きが強調されている。マジムン（化け物）をだますカタイラマーガと呼ばれる人物の知恵の話がさまざまに伝えられており、これについて福田氏は「本土における吉四六話にみられるごとく、庶民の小さな英雄として、人並みはずれた知恵を自在に駆使し、あるいはおどけ者ふう<sup>(16)</sup>に、あるいは狡猾者ふう<sup>(16)</sup>に活動する」と述べている。先の「狂言トゥナ」「狂言ガニ」「根間カマドガニ」などを主人公とする笑話の「おどけ者」話においても、彼らは知恵を働かせて成功をおさめる。もともと、こうした話は他地域でも伝承されていることではある。

したがって、このようなものが伝承されているからといって当地域において知恵を働かせた狡猾者の成功譚への変容が生じることになったと直ちにいうことはできない。しかしながら、前に述べたように、当地域においては英雄たちが知恵を働かせて勝利するという伝説・史譚が事実・真実のことと信じられ、重んぜられて伝承されているのである。その英雄たちは鳥びにとつて心を寄せる存在であった。そうした彼らの知恵の働きは尊いものとして受けとめられてきたことであろう。当地域におけるこうした特徴的な精神風土がこの話型の話を変容させることに大きく働いたのではなからうか。

### おわりに

佐々木徳夫氏は『ふるさと艶笑譚選集 第三集』（本の森

二〇〇八年）において「艶笑譚に注目するようになったのは、異なる地域で同じような艶話を何話も聞き得たからだ」とし、「将来を見据えて『艶話の型』を構築できるのではないか」と述べている。こうした話型集成を試みたものとしては、すでに述べたように成田氏の「艶笑譚目録」があるが、本稿においてとり上げた艶笑譚は一つの新しい話型として考えられよう。

この話が沖縄宮古島に伝播してゆき、主人公が交替して話の性格も異なるものに変容した事例を見出すことができたが、この変容には当地域における口承説話の豊かな伝承状況をその環境とし、人々の知恵の働きを重んじる精神風土が大きく関わったものと考ええる。

文献説話の創作・改作の方法として「主人公の交替」がいわゆるが、口承説話の世界におけるこのような変容にはこうした条件を必要としたのであった。

### 注

- (1) 『東洋研究』第八十九号、一九八八年十二月。
- (2) 『神国愚童随筆』（弁天荘、一九六〇年）。
- (3) 谷川健一氏編『日本庶民生活史料集成』第十六卷「奇談・紀聞」（三一書房、一九七〇年）所載の山内益次郎氏翻刻のものによる。
- (4) 『吉野秀政説話集』（和歌森太郎氏・谷川健一氏・鈴木棠三氏編『山口麻太郎著作集』第一巻「説話篇」、佼成出版社、一九七三年）。なお、原稿には一九三六年稿とされている。

(5) 注(3)書に同じ。

(6) 『江戸小咄の比較研究』(東京堂出版、一九七〇年)。

(7) 『好色江戸小咄集』(第一出版社、一九五二年)に解題と現代語訳された「御びく尼」を含む所載説話十八話が紹介されている。なお、林美一氏『艶本江戸文学史』(有光書房一九六四年)には原文翻刻の「御びく尼」が紹介され、武藤禎夫氏『江戸艶笑小咄珠玉集』(国文学 解釈と鑑賞 第三十二巻第五号、一九六七年四月)にも翻刻された「御びく尼」が紹介され、解説が加えられている。原文翻刻の「間女畑」全二十七話が紹介されたのは宮尾氏「間女畑 艶笑小咄本」(季刊浮世絵別冊秘画万葉 画文堂、一九七八年)であった。

(8) 注(7)武藤氏論文に同じ。

(9) 小島貞二氏・能見正比古氏編『定本艶笑落語』(立風書房、一九七〇年)では「風民弥」を本題とし、「別題の『いいえ』は、落ちから出たもので、いくなれば仲間うちの問題。一般的ではない」としている。しかし、同じ小島氏の編による『定本・艶笑落語3 花の巻』(立風書房、一九七八年)では「いいえ」の題で掲げ、その解説で「風民弥が佐野川市松になったり、上方では尾上多見江になったりする。したがって別名を「風民弥」あるいは「尾上多見江」という」とする。その実演CDには、三遊亭鳳楽「いいえ」(談志が選んだ艶噺し(二) 義眼/いいえ・日本コロムビア)、露の五郎「いいえ」(露の五郎 廓噺・艶噺集成(二) クラウン)などがある。

(10) 岩瀬博氏「沖繩の昔話」(『昔話研究入門』三弥井書店、一九七六年)、『伝承文芸の研究』三弥井書店、一九九〇年、

所収)、松浪久子氏「与那国昔話話型一覽」(『奄美・沖縄民間文芸研究』創刊号、一九七八年七月)、福田晃氏「(シンポジウム)南島の民間説話の特質 基調報告Ⅰ 日本本土を視座にして」(福田晃氏・岩瀬博氏・山下欣一氏編『南島説話の伝承』三弥井書店、一九八二年)。

(11) 拙稿「日本の民話と琉球」(福田晃氏・常光徹氏・斎藤寿始子氏編『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇〇年、『声の神話 奄美・沖縄の島じまから』瑞木書房、二〇〇三年、所収)。

(12) 福田晃氏「資料としての特質」(福田晃氏・佐渡山安公氏・下地利幸氏・岡本克江氏・山本清氏編『城辺町の昔話(下)』同朋舎出版、一九九一年)。

(13) 一九七八年八月の奄美沖繩民間文芸研究会宮古島昔話調査において旧城辺町仲原・上里マツメガさんが「藁しべ長者」を語る際に他の村人たちがあいづちを打ちながら聞くのを筆者も一緒に聞いている。

(14) 拙稿「南島の鰻女房譚」(『昔話―研究と資料―』第十三号、三弥井書店、一九八四年)、『声の神話 奄美・沖縄の島じまから』瑞木書房、二〇〇三年、所収)。

(15) 注(12)に同じ。

(16) 注(12)に同じ。

付記 注(7)の宮尾氏論文については石上阿希氏(立命館大学衣笠総合研究機構P.D.)のご指示による。記して感謝申し上げます。(ましも・あつし/立命館大学)